

ソーシャルワーク専門教育の教材研究（1）

—理論的枠組み—

佐々木政人・神波幸子

Developing Competency-Based Curricula in Social Work

Education and Practice (1)

—Ecological Perspective and Theoretical Orientation—

Masahito Sasaki and Sachiko Kounami

要旨：本研究論文では、ソーシャルワーク専門教育の具体的アプローチ法の開発と在り方を提示する。錯綜する現代社会における新たなソーシャルワーク専門教育は、より体感的で、参与型の演習教材を求めている。われわれは、本研究をとおして、人生経験の少ない履修学生がいかに現代社会の変化に関心を寄せ、その社会的変革への動機付けをしていくかの課題に取り組んだ。

本論では、研究課題の理論的枠組みを中心に、エコロジカルソーシャルワーク実践のあり方や教育課題を論議した。活用した理論は、エコロジカル実践モデル論（ライフモデル）および家族危機論である。なお、研究手法およびリサーチ法に関しては、ソーシャルワーク専門教育の教材研究（2）で詳述する。

Keywords： ソーシャルワーク専門教育 エコロジカル視座 ライフモデル 家族危機理論
Social Work Education and Practice, Ecological Paradigm, The Life Model of Social Work Practice, Family Crisis Theory

1. はじめに：本研究の目的

平成20年、愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科（現福祉貢献学部福祉貢献学科）は、ソーシャルワーク（社会福祉援助技術）演習系の授業科目の指導内容に関する見直しに着手した。この見直しに関連し、本研究メンバーは、社会福祉（援助技術）演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、及びⅣ、Ⅴの指導案の刷新を開始した。これまでも、本科目においては、複雑・多様で、しかもよりシステミックな社会問題の理解を深めるための多くの努力と工夫、アイディアを駆使してきた。本研究は、こうした貴重な努力を基盤に置き、錯綜する現代社会の心理／社会／経済の問題をはじめ、より具体的には、児童虐待、高齢者虐待、薬物乱用、いじめ問題など、今日の日本社会が、これまでに体験してこなかった未知の、あるいは見過ごさざるを得なかった諸々の社会的課題に挑戦するとともに、新たな支援アプローチ法や人材育成の基盤及びその絆の構築を最終ゴールとした。

今日、ソーシャルワーカーの専門教育・指導の過程には、すでに各種のビデオ教材、映画、小説が適宜、導入されてきている。しかしながら、その多くは、「みせっぱなし教育」、「読ませっぱなし教

育」に陥りがちであった。事実、本研究メンバーも同様の課題に直面してきた。既存のビデオ教材や小説などの思想、意図、焦点をいかに履修学生に提示し、かつその内容を深く把握するためのより良い契機に繋げる努力は、極めて難しい作業であることを痛感してきている。

ソーシャルワーク教育の内容は、流動化著しい社会情勢を背景に、ソーシャルワーク専門教育の進展とともに、大きく変貌してきている。社会問題とは何であるか。その社会的影響、拘束とはどのような状況を呈するのか。また、ソーシャルワーク実践とは、いかなる支援活動であるのか。その内容と意義とは、何なのか。人間社会における幸福およびウェルビーイングとは何か。すなわち、ソーシャルワーク実践における、知識、技能、価値など、ソーシャルワーク専門教育において取り上げなければならない課題は膨大である。

図1は、ソーシャルワーク専門教育を支える理論的共通基盤として重要な要件であり、北米を中心に展開されてきているソーシャルワーク実践を理解する上で有効な領域概念図である。主要な4領域、(1)社会問題、(2)社会福祉実践対象、(3)社会福祉実践分野、(4)社会福祉方法論に加え、専門教育に必須といえる第5の領域である(5)研究・調査領域が、われわれ福祉専門教育に携わる教員がその範疇に収めておく必要がある根幹といえる。本研究は、こうした広範な社会福祉実践の内容を、日々の教育活動にどのように反映し、かつ組み込み、より充実した豊かな人間性を創造するためのソーシャルワーク専門教育の在り方を探求する。

2. 本研究の意義及び課題

前述のごとく、本研究メンバーは、平成20年の福祉貢献学科カリキュラム改正に基づき、福祉援助職の臨床実践力を高めるための教材研究に専心した。広範な福祉実践に要請される知識、技能、価値は、多様性を求める現代社会の変動に伴い、大きく変化している。人生経験の少ない今日の学生にとって、日々の学びの過程での戸惑いは、大きなものとなってきている。

支援対象者が直面する具体的なライフサイクル上の出来事をはじめ、人生危機、さらには多様な生活問題に対する支援アプローチ、すなわちソーシャルワーク実践のエッセンスをソーシャルワーク演習系授業において、明確、かつ具体的にいかに提示するかが、多くの教員のジレンマでもある。また、こうしたジレンマに効果的に対応するための福祉実践教育の教材研究は、これまで十分には実施されているとは言い難く、本プロジェクトの主要な目的をそこに置き、研究を進めた。

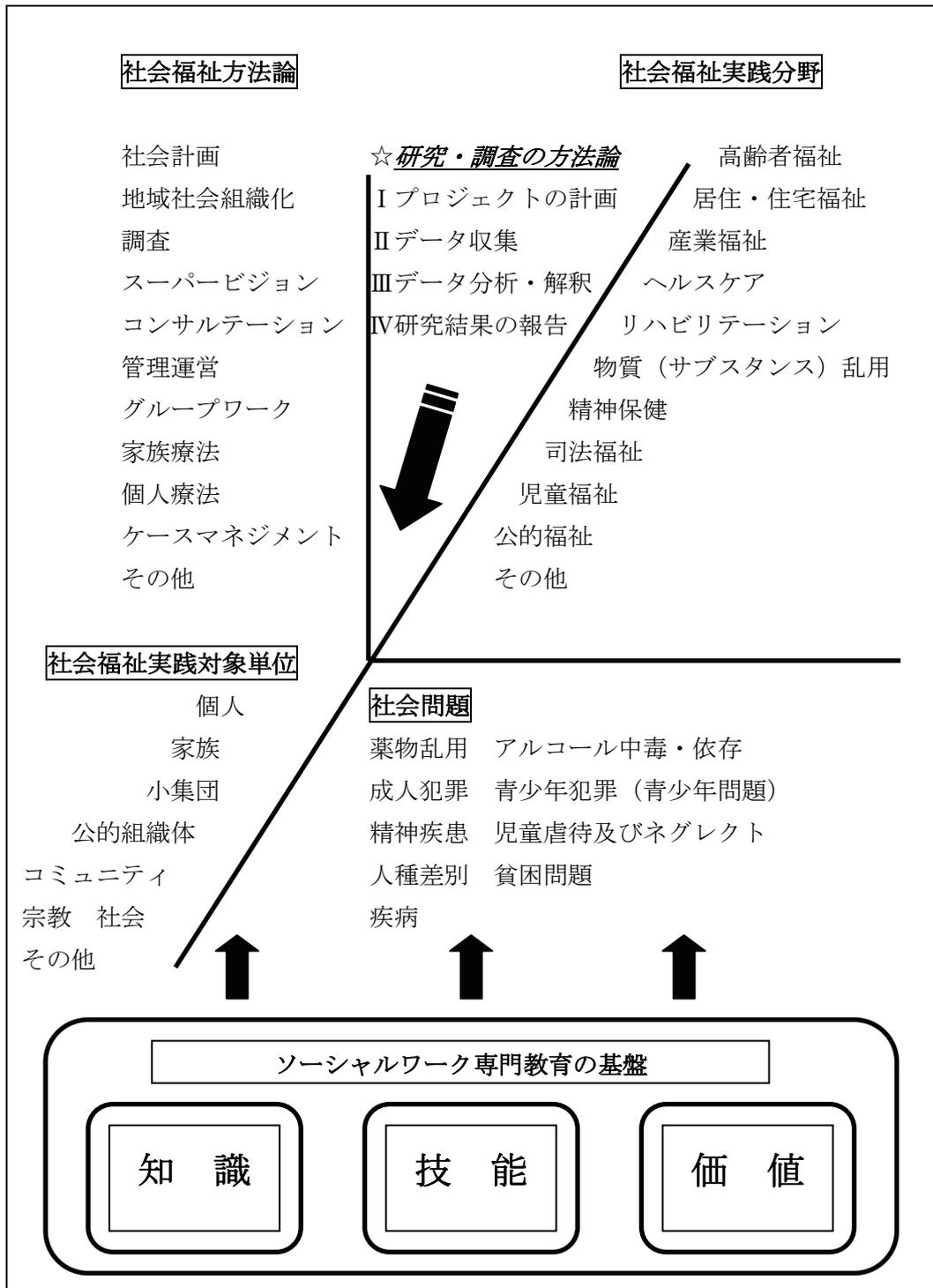


図1 ソーシャルワーク実践における4つの領域モデル及び研究・調査手法

資料: Nancy K. Carroll, "Three-Dimensional Model of Social Work Practice," *Social Work* 22(September 1977), 431.及び Popple, P.R. & Leighninger L. (2005). *Social Work, Social Welfare, and American Society (6th edition)*. p.97, Boston, Pearson Education, Inc. を参照に、一部変更を加え本研究メンバーが作成する。

本研究では、映像メディアが持っている具体性、共感性、さらには潜在的教育力に注目し、(1) 福祉実践に関連するライフサイクル上の生活課題の把握 (生活課題&人生危機)、(2) 対人援助技法の習得 (対人関係能力の構築&支援アプローチ技法の学び)、(3) ソーシャルワーク実践が内包する価

値葛藤とその理解を深めるための教育プロセスを構築することを意図した。特に(1)に焦点を当て、映像メディアをとおり、学生が、どのような問題に関心を寄せ、何を学び、将来の福祉実践にそれをどのように活かそうとしているのかを探索的リサーチ法に依拠し、整理・分析する。使用する映像メディアは、総計60本、対象学生は延べ200名である。

本件研究の中心課題及び、以下のとおりであり、学生の学びのプロセスを辿り、その理解の様相を探求する。

- (1) 学生の生活課題・人生危機に関する具体的な理解と関心を深める(知識力の促進)
- (2) 学生の対人援助技法の習得を促進し、事例研究への汎用性を促進する(技術力の育成)
- (3) ソーシャルワーク実践が抱えている複合的な価値葛藤の実存を体感させ、
かつ援助専門職者としての視点や価値観を構築する(価値・倫理力の醸成)

ソーシャルワーク実践は、多様な社会的出来事に対する極めて社会的な支援方法である。前述のごとく、社会の多様化に伴う社会的ニーズの変貌は、今日のソーシャルワーク実践にも、多くの変容を要請している。こうしたニーズに応えるための新たな支援アプローチ法の構築が今後必須であり、ソーシャルワーク専門教育には、そのニーズに対応すべき教材開発はもとより、実践活動により適合、連動した教育方法論の確立が求められている。

3. ソーシャルワーク実践の基盤理解

エコロジカルソーシャルワーク実践の目標とは、(1)社会的機能の促進(ソーシャルケア&ソーシャルトリートメント)、(2)ソーシャルコンディッションの改善の2点に集約できる。社会的な生物としての人間、その人間が生み出す家族やコミュニティ、さらにはマスとしての社会集団とがソーシャルワーク実践の活動や支援のターゲットである。また人間とその社会集団とが紡ぎだす社会関係性、すなわちそれらは、エコロジカル視座における人間及び社会の成長と発展とを真摯に意図したソーシャルワーク実践教育の中心課題そのものであるといえる。

シェーファー及びホレーショウ (Sheafor & Horejsi, 2008, pp.5-8) によれば、社会的機能とは、以下のとおりである：

- (1) ソーシャルワークのユニークな視点を理解するための鍵となる考え方であり、かつソーシャルワーク実践をその他の援助専門職とを区別する概念である(Karls and Wandrei 1988; Longres 1995)。
- (2) 肯定的な社会的機能とは、人間の基本的なニーズを充足させ、かつある特定の地域コミュニティの文化によって要請される主要な社会的役割を遂行するために必要とされている課題や活動を達成できる人間の能力である。
- (3) 基本的なニーズには、食料、住居、医療的ケアといった基礎的な要件はもとより、自分自身を災害から保全したり、社会的な受容と社会的なサポートを見出したり、人生の意味と目標を持ったりする要素を包含している。
- (4) 人間の社会的役割は、人生をとおして変化し、かつこうした役割に関連する期待は、人間のジェンダー、人種、文化、宗教、職業、さらには地域においてそれぞれ異なる。
- (5) 社会的機能の概念は、人間個々人の力量や行動と彼らが所属する社会的・経済的な環境からの要請、期待、資源、機会といった諸要件をマッチさせたり、あるいは合致させたりすることに焦点を置いている。

こうした社会的機能を充実、保証するための具体的な施策や支援方法は、今日の複雑化する社会においては必須となっている。また同時に、彼らは、よりマクロ的な支援としてのソーシャルワーク実践の在り方も強調している。すなわち、ソーシャルコンディッションの改善の重要性を下記のとおり強調している (Sheafor & Horejsi, 2008, pp.5-8) :

(1) ソーシャルワーク実践の在り方とは、支援的でエンパワメントな環境を形成し、かつ構築することである。

(2) 社会的な正義の構築、すなわち、政府、会社、力ある集団といった社会的な組織制度は、全ての人が持っている基本的な人権を理解し、支援するための平等性と道徳的な公正性を保証する。

こうした考え方を具体的にどのようにソーシャルワーク演習系科目に反映するかが、重要な課題であり、より実践的なソーシャルワーク専門教育が志向すべき学びでもある。人間と人間が織り成す社会環境とが生み出す多くの試練と課題は、米国を代表するソーシャルワーク実践の主要なターゲットであり、その中心的な基盤を構築している。彼らが注目するライフサイクル上の多くの課題は、根本的には図2のパラダイムに集約することが可能である。

人間存在と社会基盤相互の成長は、豊かな社会関係を創造するための重要な要件であり、ソーシャルワーク実践教育の原点といえる。特に人間が果たす社会的機能の促進を図るための社会的環境、すなわち家族や地域コミュニティにおける生活空間の活性化をはじめ、社会全体から要請される役割期待を十全に担うための基盤作りは不可欠である。豊かで堅固な社会関係性の創造と構築は、ソーシャルワーク実践の願いであり、祈りである。

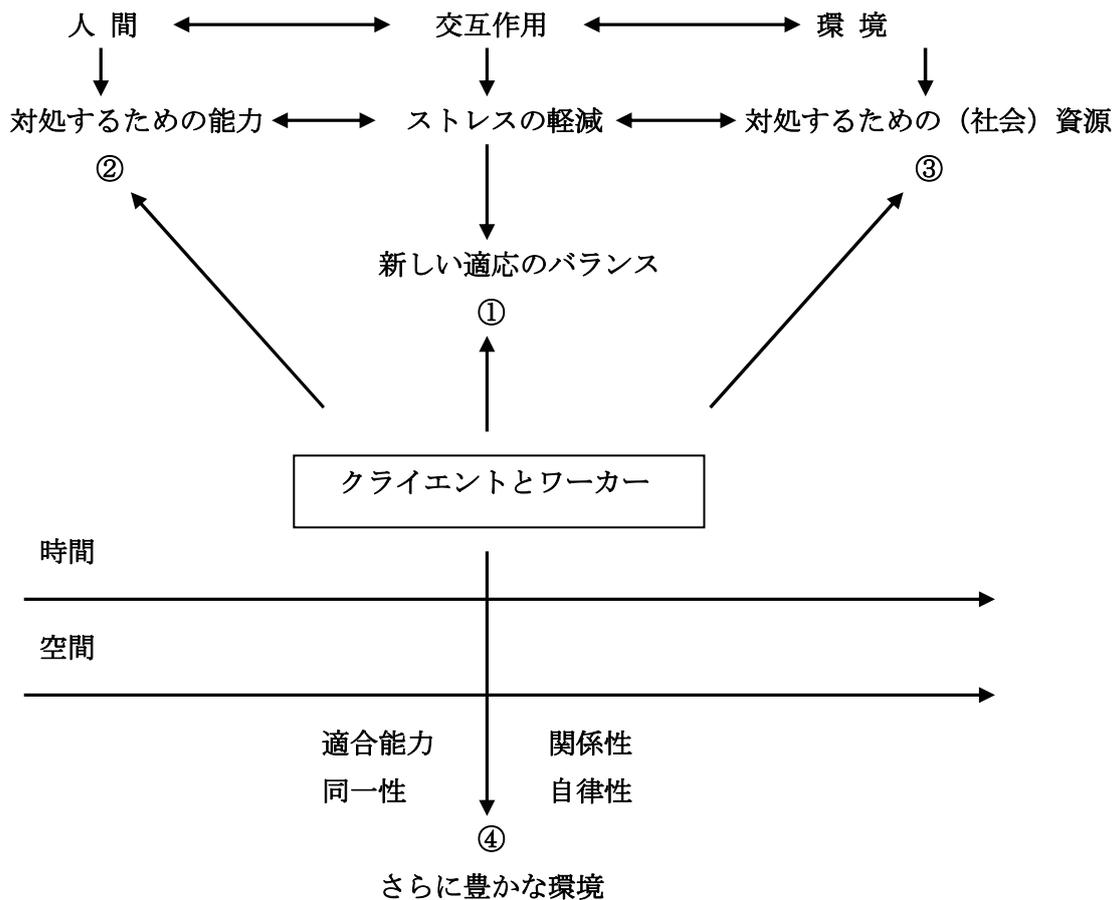


図2 ライフモデルの実践パラダイム

クライアントとワーカーは、②と③の働きかけを通して、①を生み出そうとする。そのプロセスで、クライアントとワーカーは④を獲得する。

この図表は、第21回国際社会事業学校連盟（イギリス・ブライトン、1983年）においてジェーメインが発表の資料として用いたものである。

資料：久保紘章（1986）「ライフ・モデル」『臨床ケースワーク』川島書店，p. 144.

4. 本研究が依拠する基礎理論（エコロジカル実践パラダイム）

本研究が、基本的な拠り所としているアプローチ法とモデルは、生態学的アプローチ法であり、ソーシャルワーク実践モデルはライフモデルである。このアプローチ法と実践モデルの教育内容をどのようにソーシャルワーク演習系科目に反映するかが、前述のごとく、本研究チームの課題である。

生態学的アプローチを基本とするソーシャルワーク実践モデルを開発した代表格は、ジャーメイン（C. B. Germain）とギッターマン（A. Gitterman）であろう。「ライフモデルのソーシャルワーク実践（The Life Model of Social Work Practice, 1980）」は米国をはじめ、世界のソーシャルワーク教育の現場で活用されている斬新な著書である。

彼らが注目した生態学的概念とは「相互作用関係」である。すなわち、人間＝環境が交互に作用しあう場、時間、そしてその過程と結果である。前述の図2がその全容であり、人間及び社会制度における適合能力、関係性、同一性、さらには自律性の促進こそがエコロジカルソーシャルワークの基盤である（Germain & Gitterman, 1980; 久保, 1986; 佐々木, 1988; 岡本, 1990; Germain & Gitterman, 1996;

Turner, 1996; Greene, 1999)。以下その基本概念を提示するとともに、ソーシャルワーク実践及びその専門教育との関係性を探る。多少長くはなるが、福祉専門教育を考察する上で極めて重要な論点であるので、以下詳述する。

(1) 生態学理論からの学び：適所 (Niche) 及びライフサイクル

適所 (生態学的地位 : Niche) とは重要な生態学の概念の一つであるが、人間を取り巻く直接的な環境あるいはコミュニティ成員によって形成される状況をさす。ジャーメン (Germain, 1985; Germain & 小島, 1992) はデロン (DeLone, 1979) の考えを引用し、生態学的な適所を次のように定義している。

すべての有機体 (organisms) は、「種」 (species) としてもまた「個人」としても、生存し、成長し、そして再生産するため、環境上の適所を捜し、その中に適合しなければならない。何が健全で人間的な適所であるかは、社会や時代によって異なる。適所のいかなる要素がさまざまな人々の潜在的可能性を發揮させるかは、はっきりとはわからない。「我々自身の社会において、よい適所の一つの特質は対等な機会への権利を含む一連の権利であろうと、長い間考えてきた (DeLone, 1979)」 (Germain, 1985, p. 45; Germain & 小島, 1992, p. 191)

われわれが生活する現代社会は、人間的なニーズを保証する適所を疎外してきている。21 世紀におけるソーシャルワーク実践の課題とは、この適所を創造することである。より具体的には、自然・人工的な生活空間を豊かにすることであり、また社会的な制度や福祉援助サービスを含む社会資源の充実に努力することである。人間と環境とが効果的に交互に適合した関係性を促進できる社会的な状況を創造することが重要である。

適所を構成する要素として重要な概念は**空間 (Space)** である。空間とは生態学的には居住環境 (habitat) をさす。生態学的空間とは、物理的な環境と社会的な環境とから構成されている。前者は自然環境 (山、川、湖、溪谷、森林など) や人工的環境 (橋、鉄道、車、建築物、道路など) である。また後者は私的ソーシャルネットワーク (親戚、友人、職場の同僚など) と公的なソーシャルネットワーク (福祉事務所、児童相談所、各種社会福祉施設・機関、病院、保健所など) であり、ソーシャルワーク実践及びその専門教育の根幹となっている。こうした環境は、それ自体汚染されたり、硬直化したりして、その機能を十分に果たすことができず、結果的に人間の生活を脅かす存在となることもある。物理的・社会的な居住環境の整備や調整は絶えず必要である。こうした弊害を予防的に解決する役割を担うのが、ソーシャルワーク実践なのである。

エコロジカルソーシャルワークにおいて注目すべき要件とは、**ライフサイクル** の概念である。これは、人間＝環境が交互作用を起こす場や時間的要素を組み込んだ生態学的概念といえる。すなわちライフイベント (生活上の出来事) を中心としたライフサイクル上での課題や危機の理解は、ソーシャルワーク援助の基本であり、特に援助を開始するためのアセスメント過程の要ともなっている。ライフサイクルにおける発達課題とは身体的、心理的、社会的な課題であり、結婚、妊娠、そして子供の誕生、入学や卒業、就職といった人間であれば誰でもが通過しなければならない普遍的な生活課題である。

また火事、地震、交通事故をはじめ、リストラによる配置転換や失業、離婚、自殺といった危機的な出来事もライフサイクルでの注目すべき課題であろう。表 1 が家族を中心とするライフサイクル上の発達課題である。こうしたライフサイクル上での生活課題と問題をサービス利用者と共同でアセス

メントし、現在どのような課題に彼らが直面し、解決しようとしているのかを把握することはソーシャルワーク援助の第一歩なのである。人間の成長と成熟は、ライフサイクル上での課題をどのように体験するかによって左右される。

表1 ファミリー・ライフサイクル上の課題

家族のライフサイクルのステージ	移り変わりの情緒的プロセス	発達を進めるのに要求される家族状況内での第二次的変化
1. 家族の間で：自立した若者	両親・子どもの分離の受容	a. 家族との関係での自己の分離 b. 友だちとの親密な関係づくり c. 仕事面での自己の確率
2. 結婚を通しての家族の結合：新しく結婚した夫婦	新しいシステムへの献身	a. 夫婦システムの形成 b. 配偶者を含んでの大家族や友人との関係の再調整
3. 幼児のいる家族	システムの中に新しいメンバーを受け入れる	a. 子どもたちのスペースのために夫婦システムの調整 b. 子育ての役割をとる c. 親の役割、祖父母の役割を含めて大家族との関係の再調整
4. 青年期の子どもがいる家族	子どもたちの独立を認めていくため家族境界の柔軟性を増すこと	a. 青年期の子どものシステムからの出入りを許容するため、親子関係をシフトする b. 中年夫婦や仕事の問題にも再焦点化 c. 老年への関心をもち始める
5. 子どもたちの門出と移動	家族システムへの出入り口の増加の受容	a. 二者関係としての夫婦システムの話し合い b. 大きくなった子どもたちと親との間に、おとな対おとなの関係を発達させる c. 親戚 (in-laws)、孫を含める関係の再調整 d. 両親 (祖父母) の高齢化や死に対処すること
6. 老年期での家族	世代的な役割の移行を受け入れる	a. 自分の、また夫婦の機能を維持し、身体的な衰えに目を向け、新しい家族や社会での役割選択を試みる b. 中年のより中心的な役割を支持する c. 年長者の経験や知恵をシステムの中に活かす。過労にならないようにして、老いた世代を支持する d. 配偶者、同胞、仲間の死に対処し、自らの死の準備をする。生涯を振り返り、統合する

資料： Carter & McGoldrick (1989). *The Changing Family Life Cycle: A Framework for Family Therapy* (2nd edition). Mass.: Allyn and Bacon. 及び 中堀 (1992) 「ミドル・エイジ夫婦の心理的危機」『家族心理学入門』培風館, p. 197.

適合能力の概念も重要なソーシャルワーク概念である (図2参照)。すなわち、環境との交相互作用関係を基礎に獲得できる能力をさす。直面する課題や問題を客観的に把握し、解決に向けての動機と意思を明確にし、かつ問題や課題に取り組む決定を下したり、さらには問題対処能力、あるいは社会制度といった環境要因に積極的に働きかけていくための具体的な対処能力と定義づけることができる。図3は、マルシオ (Maluccio, 1981) による生態学的適合能力である。彼は、(1) 問題解決に必要な対処能力・生活技能、(2) 問題解決に対する動機、さらには (3) 環境要因など3つの因子に着目し、この適合能力を規定している。

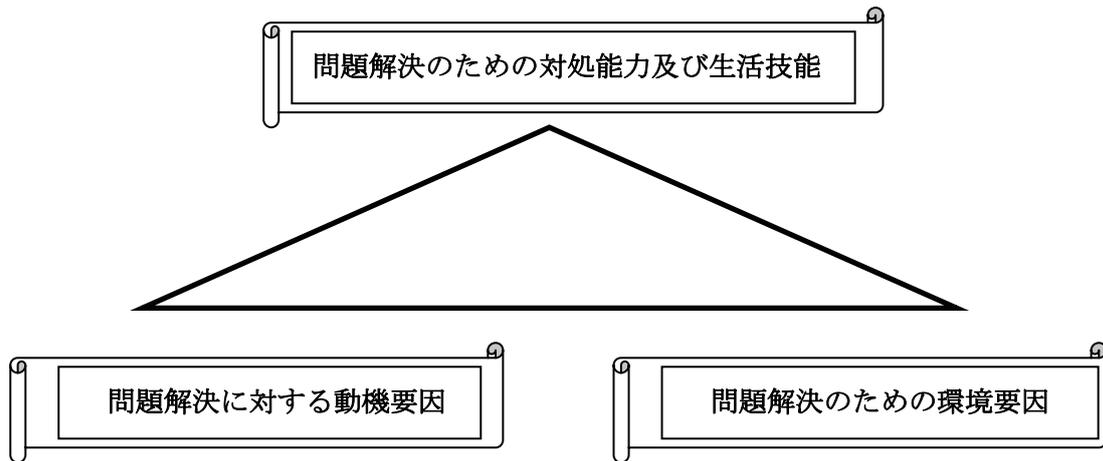


図3 生態学的適合能力

資料 : Maluccio , A.N. (1981). *Promoting Competence in Clients*. New York: The Free Press. p.8.

問題対処能力及び生活技能とは個人の持っている認知や知覚、知能、言語、さらには身体的健康の状況をさし、生活課題や問題に対する融通性、不安や多様性に対する耐性、積極性と自己指向性、現実把握、そして問題状況の判断力と位置付けることができる。同時にまた、運動能力や対人関係能力、さらには情緒の自律能力も重要な要件として、マルシオは注目している (Maluccio, 1981)。

問題解決に対する動機要因とは、問題に対する関心、希望、抱負であり、マズローのいう自己実現欲求と密接に関連している。人間は、自分を取り巻いている社会的、物理的環境に積極的に働きかけ、こうした環境を変容する体験に生き甲斐と満足を得ようとする意欲を保持する生命体もあるとするマルシオの人間理解は、肯定的な人間観の基礎をソーシャルワーク実践に提供している (Maluccio, 1981)。

環境的要因が保持している適合能力の理解も大切なソーシャルワーカーの作業である。人間の社会的な役割機能を促進する要因とは、人間関係を基礎にした関係性であり、社会性である。すなわち、家族や親戚を中心とする私的なソーシャルネットワークとの関係性であり、より広範には様々な公的ソーシャルネットワークとの交わり関係でもある。こうしたソーシャルネットワークはそれぞれ、個人が問題を解決する際に、より具体的な援助機能を発揮することが多いが、反対に様々な障壁となることもある。

サービス利用者のネットワーク分析や把握をとおして、そのサービス活用能力を高めることはもちろんのこと、ネットワークシステム側の融通性や応答性を刺激する作業も、ソーシャルワーク実践の有効な手段である。サービス提供に携わる援助機関の活性化はこうした意味においても重要なのである。生活課題に積極的に働きかけ、課題を解決した成功体験をとおして、人間は自己の存在を認知するとともに、自分自身に対する肯定感や自信、さらにはセルフエスティーム感を獲得できるのである。

関係性の概念もまた、人間＝環境との交互作用関係によって構築される要因であり、ソーシャルワーク援助の基本となる (図2参照)。グリーン (Greene, 1991) は、この関係性の概念を「人間関係を形成し、かつ自分自身を他の人に関係づける能力 (p. 275)」であると定義している。前述のごとく、人間はそのライフコースを通じて、家族や友人、地域や社会的、文化的な諸集団に所属している。この集団における様々な交わりから、家族内の役割機能やコミュニケーション、社会的な規則や規範及び社会的諸制度、さらには文化的な情操観を獲得することができる。

こうした交わり関係の創造が、何らかの障害を受ける場合がある。この現象は現代社会の特徴でもある。いわゆる関係性の欠如とは、社会的な孤立や孤独といった問題状況を誘発する要因といえる。個人＝個人、個人＝家族、家族＝地域社会、地域社会＝文化的コミュニティといったレベルにおける交相互作用関係の特徴や機能、さらにはこれらの各システムがいつ、どのように効果的な動きをしたり、あるいはそれぞれのシステムにとってストレスフルな状況に陥ったりするのかを研究する必要がある。また、こうした研究はソーシャルワーク実践の課題でもあり、人間＝環境との健全な関係性の開発と促進は個人のウェルビーイングを保証する重要な作業でもある。

同一性とは、自分が何者であるかを意識し、あるがままの自分自身を受け入れることである。自己意識を持ち始めるのは、ライフコースでいえば、特に思春期の時代であろう。自分を他者と区別でき、しかも他人に自分がどのように把握されているかを意識する時代である。すなわち、いつも自分の行動や感情を観察している別の自分の存在を意識する過程を人間は体験する。鱸（1990）は、この「もう一人の自分」を「観察自我」として、同一性を規定する重要な要因とみなしている。

この観察自我の調整機能を活用し、人間は、家族や友人との社会的な経験を広げていける。肯定的な人間・社会関係をとおして、個人は性的な同一性をはじめ、集団や民族的同一性、さらには実存的同一性などを意識し、自分自身を形成する。ソーシャルワーカーの役割とは、こうした経験を日常的な生活空間において促進するためのサービスプログラムを開発し、それをいろいろな機会において積極的に提供することでもある。

自律性とは、自己統制能力をさす。自分自身の置かれている状況を的確に把握し、自分自身が選択すべき方向性を決定し、かつ自らの意思や動機を動員し、自己実現過程を肯定的に体験できる能力と定義できる。特に発達過程における自己の役割認知やその遂行経験は、個人にとっての貴重な学びの機会でもある。相互の役割期待や役割葛藤における問題解決をいかに体験するかが、個人の問題解決能力やセルフエスティームの獲得を左右する重要な要因である（図2参照）。この概念もまた人間＝環境との交相互作用関係の中で培われるのである。

これまでエコロジカルソーシャルワークにおける基礎理論に関して鍵となる概念を中心に考察してきたが、人間（個人）と環境を支える援助実践をより一層豊かにするための福祉実践モデルを開発するためには、自己心理学をはじめ、一般システム理論、さらには生態学といった人間行動を理解するための基礎理論系の研究及び福祉専門教育の再構築が不可欠となっている。

（2）家族危機理論からの学び：二重ABC-Xモデル

本研究は、その理論的な枠組みとして、マッカバン（1981）の提唱する家族ストレス理論とラザルスおよびフォルクマン（1984）の心理・社会的ストレス理論にも依拠する。石原は以下のように家族ストレスを定義している。

家族ストレスというのは、ある生活パターンをつくり上げている生活システムとしての家族に、なんらかの刺激要因—これをストレス源となる出来事として捉えることが多い—が加わることによって、従来の生活パターンが攪乱され、既存の対処様式や問題解決方式では平衡を維持できない状態（これを危機と呼ぶ）にたち至る状況、さらにそこから立ち直ろうとする努力とその結果までを含む動態的な過程を指す（p.18）。

図4は、マッカバンの二重 ABC-X 家族ストレスの形成過程を構造的に理解するための図である。本図は、家族ストレスを理解する上で貴重な理論的枠組みとして、日本におけるソーシャルワーク実践に携わる臨床家の間でも認知されてきている。

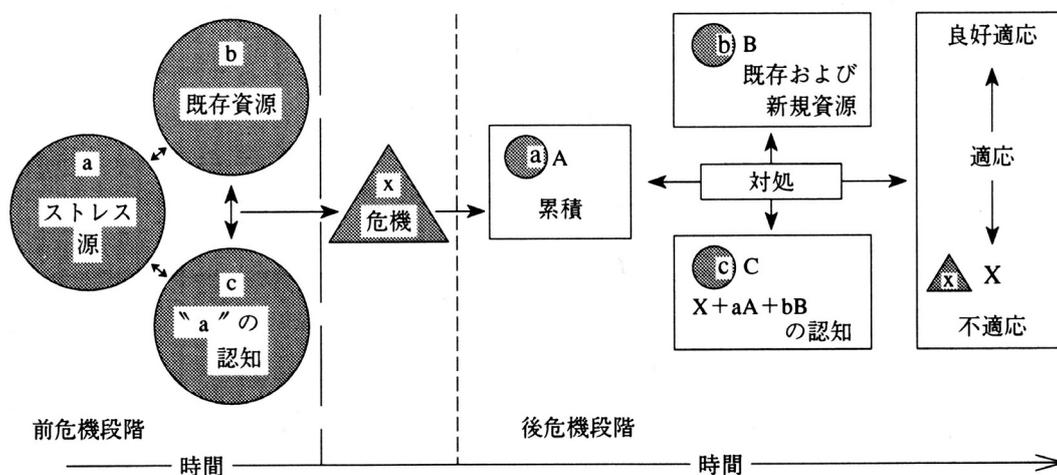


図4 二重ABC-Xモデル

資料:石原邦雄(2000)『家族と生活ストレス』放送大学教育振興会 p. 100 及び MaCubbin & Patterson (1981). *Systematic Assessment of Family Stress Resources and Coping*. University of Minnesota, Family Social Science. p. 9

家族を取り巻く家族ストレスには、多様な要因が考えられる。湯沢(1972)は、ヒルの学説を基礎に、家族ストレスの因子を次のように分類している。ヒルは、家族ストレス要因を、(1) 家族外原因(戦争、天災、不況、失業、突然の窮乏、その他)、(2) 家庭内要因(病気、アルコール中毒、浪費、不貞、非行、その他)、(3) 家族構成の変化(病死・事故死、離婚、家出、婚入、老親との同居、その他)、(4) 家族機能の喪失(収入稼得、家事労働、情緒安定、養育費)といった4つの視点から整理している。

家族がこうしたストレス因子をどのように、認知し、かつ対処できるか、またこうしたストレス因子に対する家族が動員できる、私的ネットワーク資源及び公的ネットワーク資源をどのように自覚し、さらには導入できるかが、その家族の問題対処のレベルに大きく影響するのである。図4からも推測できるように、予防的な視点から言及すれば、前危機段階での早期の支援が、最初の重要な課題であり、その克服過程をどのように体感するかが、ストレス対処の耐性化を促進するとともに、後期危機段階における問題解決及び適応状況の結果をも左右するのである。

アギュララとメズニック(1974)は、危機的出来事に対する対処過程で重要な課題を以下の3つの視点から整理している。

- (1) 危機的出来事に関する現実的な認知を援助すること。
- (2) 適切な家族・社会的なサポートを充実、かつ提供すること。
- (3) 適切な対処機制や問題解決能力を培いそれを活用させること。

危機理論及び家族ストレス理論の理解と学びは、ソーシャルワーク演習系科目の重要な要件の一つである。特に、危機理論の理解力と危機に対応するための援助技法の習得及び社会資源サービスの創造と提供に関する知識と臨床経験は不可欠である。個人や家族、さらには地域が持っているストレングスの要件をいかに高め、かつ危機的出来事に対処するための具体的サービス提供は注目すべき課題

である。こうした要件を効果的に指導内容に盛り込むための工夫が、今後一層、科目担当教員に求められている。

5. ソーシャルワーク専門教育の内容及びその過程

ソーシャルワーク演習系科目は、教育カリキュラムとしては、幾多の社会福祉士養成課程の改正に基づき以下のとおりに改変され、最終的には下記に示す教科科目名及び教育内容となっている。また、教育過程においても改変ごとに適宜教育する時期を調整するなどの工夫をしている。各教科担当教員はそれぞれの特徴を駆使しつつも、基本的には以下の内容を網羅することに努力してきている。

教育内容は、大きく基礎編と応用編に分割している。基礎編（社会福祉演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）は、2年生に配置し、3年生では、社会福祉実習との兼ね合いも考慮しつつ、応用編（社会福祉演習Ⅳ、Ⅴ）を組み込み、より総合的な教育内容を組み込んでいる。以下に示す内容は、その一部であり、教育カリキュラムにどのように効果的に配置し、履修学生の知識力、技術力を成長させるかが、今後の課題といえる。

愛知淑徳大学では、教科担当教員の独自性を尊重し、統一した授業案は作成していない。下記の教科内容は、本研究チームが採用している基本概要である。その内容は、大きく基礎編及び応用編と2つの流れに沿って、授業内容を構成している。

社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（基礎編）

- (1) 社会福祉演習の意味と位置づけ
- (2) ソーシャルワーカーの倫理及び倫理綱領（ソーシャルワーク倫理ハンドブック、その他各種の映像・小説・福祉関連図書などを活用する）
- (3) ソーシャルワーク技法の基本
 - ①自分を伝える（自己紹介、自己表現、自己絵本）
 - ②自分を理解する（ライフヒストリー、エゴグラム、自己覚知などの手法を適宜導入する）
 - ③他者を理解する（疑似体験やロールプレーを通して、学生同士やグループの中で自己を表現することや、他者理解ができるようなワークを活用・導入する）
- (4) 面接技術（コミュニケーション技術の習得、より具体的には、マイクロカウンセリング技法の活用を基本に、サービス利用はもとより、同僚、各組織機関に働く人材とのラポールの形成、言語的・非言語的コミュニケーションなどの理解を深める）
- (5) ソーシャルワーク援助過程の基本的理解

社会福祉演習Ⅳ・Ⅴ（応用編）

- (1) 社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（基礎編）の復習
- (2) アセスメント技法の習得（マッピング技法：ジェノグラム・エコマップなど、アセスメントシートを理解、事例から具体的なアセスメント技法を学ぶ）
- (3) 社会資源の活用・社会資源の創造（事例を通して、分野別の社会資源の現状を理解し、かつ不足している社会資源を構築するためのノウハウを理解する）
- (4) 支援計画のプランニング技法（自立支援計画及びケアプラン作成を体験的に学習し、個別援助計画や集団・地域援助計画の基本を学ぶ）
- (5) 各福祉分野のケアマネジメント技法に関する理解を深める
- (6) ソーシャルワーク実践の価値・倫理

また、以下の内容は、ソーシャルワーク実践の具体的流れである。ソーシャルワーク実践の援助過程には、多くの研究者、実践家により理論化されている。本例は米国を代表するヘッパース&ラーセン (Hepworth, D.H. & Larsen, J.A. 1993) の理論を3つの実践プロセスに、筆者らがまとめたものであり、本研究チームは、この流れに沿って具体的な指導案を作成し、かつ授業を進めつつある。

第一段階： 探索、アセスメント、及び計画

- (1) ラポートを築くこと (的確なウォームアップ期間を活用する)。
- (2) クライエントの自主性に注目しつつ、クライエントが現在位置している場所からスタートする。
- (3) クライエントの問題及びエコロジカル的背景を探索する。
- (4) 問題が、機関の目的、資源、及びクライエントのサービスに関する有資格性に合致しているかどうかを決定する。
- (5) 必要とされる援助機関への送致をする。
- (6) 文化的な要件に配慮し、援助過程に対するクライエントの期待を探索する。
- (7) 多様な視点からのアセスメントを構成する。
- (8) 目標を協議し、優先順位付けをする。
- (9) 役割を明確にする。
- (10) 変化に向けた合意手段を含む契約を交わす。

第二段階： 実施及び目標達成

- (1) 目標を一般的な課題や具体的な課題に整理し順位付けをする。
- (2) 介入方法を選択し、かつ実施する。
- (3) 自己効力性を促進しつつ課題実施に関する計画を作る。
- (4) セッションの焦点を維持する。
- (5) セッション間の継続性を維持する。
- (6) 進捗状況をモニターする。
- (7) 変化に対する障壁を見極め、かつ明示する。
- (8) 変化を促進するための適切な自己開示や自信保持のための方法を導入する。

第三段階： 評価及び終結

- (1) 終結のためのレディネス (準備状況) を評価する。
- (2) 政策 (原則) や課題 (問題) に留意して終結のための計画を協働して作る。
- (3) 積極的な学習及び問題解決を強調する。
- (4) 変化を維持する戦略方法 (手立て) を計画する。
- (5) 結果を評価する。
- (6) フォローアップ評価を実施する。

前述のごとく、われわれのソーシャルワーク演習系科目においても、こうした支援プロセスは、具体的な事例分析、支援計画立案作りなどの教育過程において適宜提示し、指導に当たっている。教員側の課題としては、こうした援助プロセスの理解を促進するための実践的工夫が必要とされる。また、社会福祉現場実習でどのように本プロセスを学生に体験させえるかの課題は、配属される実習現場の実状やスーパービジョン体制の状況との関連性もあり、多くの課題が残されている。より具体的で、実践的で、しかも体験的な教育的配慮が必須となっている。

6. ソーシャルワーク専門教育の課題と目標

今日、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授は、日本の大学教育の在り方に一石を投じている。対話型授業の推進を独自の手法で、日本をはじめ、米国はもちろん、世界各国で注目を浴びている。本研究チームもまた、意欲的に彼の展開している授業形態を採用しつつある。特に彼の授業内容や授業の展開方法は、本ソーシャルワーク演習系科目にとって不可欠の要素を包含している。福祉哲学の構築過程を基盤に、履修学生との対話をとおして、新たな社会変革へのアプローチ法が創造されると確信している。社会的正義の意味や価値をソーシャルワーク実践及び専門教育の中でどのように育み、かつ促進するかが問われてきている。

「家族からはじまる小さなデモクラシー」とは、1994年国連総会で提言されたスローガンである。日本でも「家族の危機」が叫ばれて久しいが、家族を取り巻く問題とニーズは、拡大している。国際的にも、先進国、開発途上国を問わず、家族の構造的な変容や、役割機能上の変化にともない、様々な社会問題が顕在化しつつある。特に、児童や高齢者、障害者といった社会的変化に脆弱な人々の生活福祉・人権保障の問題は、重要な国際的課題である。貧困と飢餓、ホームレスとストリート・チルドレン、アルコール・薬物依存、児童・高齢者虐待、保健医療サービスの欠如、不登校、校内暴力など、学校や家族を取り巻く社会的な問題は深刻である。

しかも、こうした問題は、一般家庭においても直面しえる普遍的な課題といってもよい。もっとも、これらの課題は、国、地域においてそのインパクトは異なるが、共通していることは、多面的で、総合的な家族福祉／人権政策の充実が必須であるといえる。家族の役割・相互支援機能を高め、より健全な生活環境を提供できる、社会的な土壌形成が、世界の願いである。

日本社会が直面する家族課題は、今日の社会情勢を反映して多様である。こうした課題に対応するための福祉専門教育の在り方とその存在意義は大である。家族のウェルビーイングの促進とは、家族の成長力に期待する。家族を中心に、個人や地域社会がともに自分自身が持っている潜在力に気づき、かつライフサイクル上における課題に意欲的に取り組む意思と具体的な社会的資源の創造に努力することである。ソーシャルワーク実践教育の意義とはこうした連帯する社会の創造に貢献することである。

これまで、日本をはじめ各国では、それぞれの社会的ニーズに沿って、いろいろな支援サービスが立案・実施されてきている。こうした家族支援サービスの目標とは、次のように要約できる (Garvin & Tropman, 1992)。

- (1) 家庭生活の支援と、その促進を目指し、対象者の施設収容を誘発する家族問題を未然に防止・緩和すること。
- (2) 家族相互間の緊張や、葛藤の原因を見極め、それを改善し、家庭崩壊の可能性を軽減し、家族成員の発達上のニーズをより良く把握し、それを十全に満たすこと。
- (3) 健全な家庭生活や、人々の健全育成を促進するための地域・社会環境を形成すること。すなわち、家庭を支える経済保障、就労保障、住宅保障、教育保障の充実を計ること。
- (4) より脆弱な立場に立たされやすい人々の最善の利益を擁護すること。

より脆弱な立場に立たされやすい家族のウェルビーイングの保障と達成には、こうした社会的なケア支援システムを、総合的に整備するための家族福祉政策が必須といえる。また、その実践活動に携わる有能なソーシャルワーカーの養成が不可欠でもある。本研究チームは、対話をとおした実践的教育、体感をとおした実践的教育とは何かを、ソーシャルワーク演習系教育で構築していきたい。

21世紀の日本社会における社会的変革は、個人や家族のストレングスを基調とする、実践的コミュニティ・ソーシャルワークの充実が鍵となるであろう。

本研究枠組みに関する論文は、以下の3つの論文に依拠している。

- (1) 佐々木政人 (1994) 「国際家族年と家族ソーシャルワーク」『たけおか』第12号 p.16.
日本社会事業大学報
- (2) 佐々木政人 (2000) 「エコロジカル・ソーシャルワークの構築と基礎理論——ライフモデルを中心として」『社会学部紀要』第17号 pp.39-49. 龍谷大学社会学部学会
- (3) 佐々木政人 (2001) 「21世紀におけるソーシャルワーカーの役割機能」『社会学部紀要』第18号 pp.38-45. 龍谷大学社会学部学会

参考文献

(1) 海外の文献

- Carroll, N.K. (1977). "Three-Dimensional Model of Social Work Practice", Social Work, 22(September 1977), p.431.
- Carter, B. & McGoldrick, M.(1989). The Changing Family Life Cycle: A Framework for Family Therapy (2nd edition). Mass.: Allyn and Bacon.
- Erikson, E. H. (1963). Childhood and Society (2nd edition). New York: Norton.
- Garvin, C.D. & Tropman, J.E. (1992) Social Work in Contemporary Society. N.J.: Prentice Hall.
- Germain, C. B. & Gitterman, A. (2008). The Life Model of Social Work Practice. (3rd edition). New York: Columbia University Press.
- Goldstein, E. (1986). "Ego Psychology". In F.J. Turner (Ed.), Social Work Treatment (pp.375-405). New York: The Free Press.
- Greene, R. R.(1991). The Ecological Perspective: An Eclectic Theoretical Framework for Social Work Practice. In R. R. Greene and P. H. Ephross (Eds.), Human Behavior Theory and Social Work Practice(pp.261-295). New York: Aldine De Gruyter, Inc.
- Greene, R. R. (1999). Human Behavior Theory and Social Work Practice (Second edition).New York: Aldine De Gruyter, Inc.
- Greif, G. L. & Lynch, A. (1983). "The Eco-Systems Perspective." In C.H. Meyer (Ed.), Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective (pp.35-71). New York: Columbia University
- Hepworth, D.H. & Larsen, J.A.(1993). Direct Social Work Practice. Cal.: Brooks/Cole Publishing Company.
- MaCubbin, H.I. & Patterson, J. M (1981). Systematic Assessment of Family Stress Resources and Coping. *University of Minesta*, Family Social Science. p. 9
- Maluccio, A. N.(1981). "Competence-Oriented Social Work Practice: An Ecological Approach." In A. N. Maluccio (Ed.), Promoting Competence in Clients(pp.1- 24).New York: The Free Press.
- Minuchin, S.(1974). Families and Family Therapy. Cambridge: Harvard University Press.
- Nye,R.D.(1975).Three views of man: Perspectives from Freud, Skinner and Rogers.CA: Wadsworth Publishing

Co.,Inc.

Pincus, A. & Minahan, A.(1973). Social Work Practice: Model and Method. Illinois: F. E. Peacock Publishers, Inc. Press.

Poppo, P.R. & Leighninger L. (2005). Social Work, Social Welfare, and American Society (6th edition). p.97, Boston, Pearson Education, Inc.

Rodway, M.R.(1986). " Systems theory." In F.J.Turner (Ed.), Social Work Treatment (pp.514-539). New York: The Free Press.

Sheafor , B.W. & Horejsi,C.R. (2008). Techniques and Guidelines for Social Work Practice (8th edition). Boston: Pearson Education.

Turner, F.J.(1996). Social Work Treatment (4th edition). New York: The Free Press.

White, R.W.(1963). Ego and Reality in Psychoanalytic Theory. New York: International University Press.

(2) 日本の文献

アギュララ・C・ドナ & メズイック・M・ジャニス (1974) 『危機療法の理解と実際』
(小松源助・荒川義子訳) 川島書店.

アメリカ家族療法学会 (1986) 『家族療法事典』(日本家族心理学学会訳・編) 星和書店
石原邦雄 (1989) 「家族研究とストレスの見方」『家族生活とストレス』石原邦雄編
垣内出版社. 11-56.

石原邦雄 (2000) 『家族と生活ストレス』放送大学教育振興会.

岡本民夫 (1990) 「ライフモデルの理論と実践」『ソーシャルワーク研究』 Vol. 16, No. 2.
86-92. 相川書房.

太田義弘 (1992) 『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠心書房.

太田義弘・秋山藤二 (1999-A) 『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館.

太田義弘 (1999-B) 『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規.

亀口憲治 (2000) 『家族臨床心理学』東京大学出版会.

川田誉音 (1992) 「社会福祉援助技術の歴史と理論」『社会福祉援助技術総論』. 108-159.
中央法規.

久保紘章 (1986) 「ライフ・モデル」『臨床ケースワーク』133-145. 川島書店.

佐々木政人 (1988) 「ソーシャルワーク専門職化の動向と課題—アメリカ合衆国の場合」
『ソーシャルワーク研究』13 (4) . 232-240. 相川書房.

佐々木政人 (2000) 「エコロジカル・ソーシャルワークの構築と基礎理論—ライフモデルを中心として」『社会学部紀要』第 17 号. 39-49. 龍谷大学社会学部学会.

佐々木政人(2001)「21世紀におけるソーシャルワーカーの役割機能」『社会学部紀要』第 18 号 . 38-45.
龍谷大学社会学部学会.

スキレピ・J・A/ティード・E・L/トレス・R・D (2005) 『コミュニティ心理学』(植村勝彦訳) ミネ
ルヴァ書房.

社会政策学会編 (2005) 『少子化・家族・社会政策』法律文化社.

佐藤豊道(1985).「社会福祉実践の生活モデル—生態学的アプローチ」『社会福祉研究』第 36 号. 13-18.
鉄道弘済会.

- カレル・B・ジャーメイン (1992) 『エコロジカルソーシャルワーク』 (小島蓉子訳) 学苑社.
- 鑪幹八郎 (1990) 『アイデンティティの心理学』 講談社.
- 中堀仁四郎 (1992) 「ミドル・エイジ夫婦の心理的危機」『家族心理学』 193-206. 培風館.
- 野々山久也 (2009) 『家族社会学』 世界思想社.
- 深津千賀子 (1989). 「自我と適応ーハルトマンの自我心理学を中心に」『青年心理』 No.76. 24-30. 金子書房.
- ルードヴィック・フォン・ベルタランフィ (1990) 『一般システム理論』 (長野敬・太田邦昌訳) みすず書房.
- 望月嵩・本村汎 (1980) 『現代家族の危機』 有斐閣.
- 森本照雄 (1993). 「防衛機制」『現代社会福祉事典』 (p. 422) 全国社会福祉協議会.